牧師ライモンドは諜報員だった

物理学科１年　岡崎隆行

ルチアが狂乱し倒れた後、ライモンドはノルマンノに罪があるというが、私はこの言葉に言葉通り以上の意味を含んでいるのではないかと考えた。そこで、本当にノルマンノが悪いのか、主要な登場人物を確認して、この言葉の裏を考えてみる。

ルチアに罪があるとしたら何が挙げられるだろう。恋に落ちてしまったのは仕方ないとして、エドガルドを信じきれなかったこと。これはエドガルドにも同じことが言える。また、蔑ろにされがちだがアルテゥーロの殺害は重罪である。次にエンリーコだが、彼はこの事件の主犯といえる人物と言えよう。この事件は兄であるエンリーコがルチアに無理強いをしたことが大きな原因であることは明らかである。さてノルマンノはどうか。確かにライモンドが言うように今回この事件の引き金を引いたのはエンリーコに告げ口をした彼と見てよい。しかし、この事件は、いずれは２人の関係が発覚してしまい、告げ口の有無に関係なく同じようなことが起こってしまったのではないだろうか。だとしたら、彼に大きな罪があるとは思えない。ではライモンドには罪はなかったのだろうか。いいやそんなことはない。彼も確実にエンリーコに加担していた一人であったはずである。ライモンドがどのように思っていたとしてもアルトゥーロとの結婚を進めていたことには変わりない。このことからライモンドにも罪はあるのは間違いなさそうだ。こう見てみると、１人１人にそれぞれ罪はあるように思える。ではなぜランモンドはノルマンノがこの流血の原因だなどと責めたのだろうか？

次にライモンドの立場について見てみると、2009年のレポートに『色がそれぞれの所属を表している』というものがあった。確かに青、赤、白がそれぞれの家を表しているようだがライモンドはどうだろう。黒。〇彼は冒頭から終わりまでずっと黒い服を着ている。ということは、ライモンドはどこの家にも属していない人間であり、ランメルモール家の人間ではないということがわかる。つまり、彼にとってランメルモール、レーヴェンスウッド両家の衰退は大きな問題ではないのである。

ここでセリフ時から先の登場人物たちの状況を見てみると、ルチアは死に行き、エンリーコは惨いことをしたと気づき苦しむ。また、ノルマンノはライモンド

のセリフによって罪の意識に苦しむことになるだろう。そして、エドガルドだが彼は短剣を腹に突き立て死んでいってしまった。この時、ライモンドは自分の持っていた剣を与えなかったにしても、まったく阻止しようとしていない。彼は聖職者であるからしてある程度の処置は施すことができたのではないだろうか。しかしそれをしなかったため、ライモンドを責めることができる人間はいなくなったのである。もし仮に生き残ったエンリーコやノルマンノが教会に対しライモンドの罪を問おうとも、切り札を失い、カトリックの国、スコットランドで落ちていく国教会のアシュトン家、それも自らにも罪のある２人が罪を問うことすら困難であろう。最後に一切罪のない牧師ライモンドは教会に戻れば難なくこの件から離れることができる。つまりライモンドの１人勝ちである。そのための１つの過程があのノルマンノへのセリフだったのである。

ではそんな巧妙な考えをライモンドはいつから持っていたのだろうか。
アルテゥーロとの結婚を勧めていたときは確実にまだだろう。○だがこの頃からライモンドはルチアと一緒にいることが多くなる。○アルトゥーロ殺害の発見者も彼である。また、エドガルドが乗り込んだ時に争いをやめるよう歌っている。この時から最悪の事態を考え、殺害が起こってしまったとき罪から逃れようと考えたのではないだろうか。

ここでライモンドの“国教会の人間”という立場から考えてみると、彼にはカトリックの繁栄を阻止、国教会の人間の擁護をする必要があるはずだ。一見彼は、エドガルドがフランスにわたって、スチュワート朝（カトリック）のために画策することの阻止、エドガルドの家（カトリック）の断絶の両方を成功させている“国教会の人間”の人間のように見えるが、あのセリフから考えると、国教会であるランメルモール家の人間をも陥れようとしている。このことから、実はライモンドは“国教会の人間”ではないのではないか。

ではこの両家を衰退させる必要のあったのはいったい誰だろうか？元は王権を狙うほどの勢力だった２つの家を１番恐れているのは王であろう。つまり、ライモンドは“国の人間”“国のスパイ”だったのはないだろうか？そう考えれば彼のスムーズな立ち回りも理解できるだろう。この考えが裏にあったなら実はこのオペラの主人公はライモンドとも取れるだろう。